第３回敷島エリアグランドデザイン有識者意見交換会　議事要旨

日時：令和 3 年 7 月 29 日（木）18 時 30 分
場所：群馬県庁 29 階　第 1 特別会議室

１．開会

２．あいさつ

～資料説明（事務局）～

３．意見交換
（４）デザインガイド素案について

A 委員：　「つかう」「みせる」「はぐくむ」の場所と将来像の書いてある場所が逆ではないでしょうか。将来像の最後の結論が「発信し続けていく」だと、その結果どうしたいというゴール設定がない。「つかう」「みせる」「はぐくむ」のそれぞれの言葉に基づく活動によって群馬県前橋市の人々をつなぎ、群馬県前橋市の人たちにとって誇りになる、シビックプライドとなるエリアを目指すとか、発信するというのが将来像のゴールだと、まだゴールに行っていないのではないでしょうか。発信し続けていくことが終わりではなくて、その結果群馬県前橋市にとってこのエリアが何になるのでしょうか、何をしたいのでしょうかというところまでもう一段言葉が足りないのではないでしょうか。

事務局：　「ライフスタイルをデザインし、発信し続けていく」、その結果どうなっていくかこの後に続く言葉についてもう少し検討させていただきたい。

B 委員：　コンセプト（案）の修正ポイントを拝見させていただいていて、大筋は皆さんのほうでご検討されている内容でいいのではないかと思うのですが、50 年後というところを今日改めて検討した中で、ファイルを共有させていただいてもよろしいでしょうか。

～以下、ファイルの説明～
（※ファイルは非公表）

事務局：　本多静六さんが作ったときから癒しのスポットであったり、昭和の初期から運動、スポーツを介した幸せを感じる場ということで整備もこれまで進んできております。そういったものを大事なところはしっかりと継承しつつ、新たに交流人口をいかに確保していくかということがこれからの課題かなというところは 1 つ感じているところであります。
資料の修正については検討させていただき、まとめをさせていただきたいと思います。

～資料説明（事務局）～デザインガイドについての意見交換

C 委員：　新しいライフスタイルをデザインすると書いてあるのですが、今現在のライフスタイルと変わっていないように印象として受ける。絵で表現するというのはなかなか難しい。普通に敷島エリアを再整備するための絵としては、今現在であればこれでいいと思うのですが、

50 年後を見据えたときにもう少し前進した何かデザインガイド、指針を示しておいたほうが今回の今やっている作業も意義が高まるのではないかと感じました。
このデザインガイドを作成して、今後 50 年後に向けていろいろ敷島エリアを整備していこうということにこれが使われていくんだと思うのですが、もう少し先を見据えたものが示されていたほうがいいのではないかと思います。

E 委員：　本日の資料で、50 年後の将来像というものをデザインガイドが示しているとすると、これ 50 年後かな？という印象を持ちました。これが 50 年前に作られたプランで、50 年後の将来像、つまり現代だと言われたらそうかなと思うのですが、あまり半世紀後のライフスタイルを感じないというところが課題なのではないかと思いました。
また、同じような規模感の他の公園のデザインガイドだと言われても、そのまま成立してしまうのではないかと思わせるところがあって、敷島公園でなければこういう案にはならないよねというところがちょっと感じられない、つまり敷島公園独自の潜在価値や個性が活かされていないというふうにも思いました。
私も画面共有させていただいてもよろしいでしょうか。

～以下ファイルの説明～
（※ファイルは非公表）

A 委員：　50 年後の姿をこのデザインに書いてくださいというのはなかなか大変な命題なのだと思う。50 年後の姿を具体的に事例を挙げていくのは難しい。確かに 50 年後この公園をどうしたいんですという最終目標と将来像というゴールの設定を明記してからデザインを描かないとどうしてもデザインのベクトルがブレてきますし、ベクトルがバラバラだと思いつく今の新しいデジタルだの自動運転だの、そういう姿をバラバラに描かざるを得なくなってくるので、敷島エリアを最終目標として、そして将来像として何をします、何をしたいんですというワーディングを共通認識としてみんなで持った上で、もう一度この事例とか素案を見直したほうがまとまりが出てくると思います。

D 委員：　50 年後のことも見据えて作るというのはすごく大事だと思って、一方で具体的にどういうところまで想像できるか、ここにいる誰もできないと思います。ただそのときに、もう少し「誰が」というところに関してはこちら側からの意思みたいなものを持った上で作っていったほうがいいのではないかなということを思っていて、かつ、コンセプトとしてライフスタイルをデザインするということ自体はすごくいいと思うのですが、多分人のライフスタイルを考えたときに、公園の中で完結するものではないと思うので、例えば働くときにここを使う人が東京と 2 拠点しながらやっている人なのか、地元にずっといらっしゃる方なのかとか、日中、山を登った後にこの公園の近くで働くのかとか、この公園だけではなくて、周りのものとの関係性の中で結構ライフスタイルが出てくると思うので、もう少しいくつか具体的なターゲットを想定して、周りのものとの関係性を踏まえたライフスタイルというものを想定しながらやっていくといいのではないかということを全体として思いました。
e-バイクとかドローンとか具体的な技術に関して、5 年後、10 年後も読めないという世界

だと思うので難しいとは思うのですが、公園内にスローで動くエリアと、もっと早くアクティブに動くエリアをつけるとか、抽象度は高いけれども人のライフスタイルを定義するような、そういう表現で書いておけば、別に 50 年後であっても古びないものになるということなのかなと思っています。もう少し抽象度を上げるけれども、ライフスタイルを実態的に表すような、そういう表現で全体的に作っていったらいいのではないかと思いました。

B 委員　：つかう」と「みせる」という言葉に僕はすごく違和感がありまして、整備指針として、「つかう」に対しては「出会う」、結果的にこの公園に行って誰かに会うとか、いろいろな人と人とが出会うのもそうですし、自分の中でのある種の Well being が高まっていくような気づきやインスパイアなものに出会っていくという意味での、何かに出会える。だから出かけるという動機のデザインが 1 つ指針になったらどうなのかということと、今後の社会全体で人が減っていくという中、誰かと出会えたり、誰かと関われたりという意味で何か運動でもそうですし、ここの公園の中の環境を通じて何かと交わっていくということもそうなのですが、物から離れて人中心で行ったときには最後アクションにどう落ちるんですかというのは、交わるという言葉にこれを置き換えていっても実は企画全体は成立するのではないかということを思ったりもしています。
「はぐくむ」に関しては、非常に素直で、これはこのままでいいのではないかと思うのですが、例えばこの辺の公園全体の整備の指針とか考え方みたいなところについて皆さんのいろいろな思うところのワーディングというのを出されると非常に面白くなるのではないかと思いました。
誰かに出会えたり、誰かと交流できたり、ただ単に自分一人でその空間を楽しむということ以外にプラスアルファの部分を皆さん求めて公共空間というのは集まってくる気がするので、そういったところを指針の中にきちんと盛り込んでおくことで、これは恐らく 30 年後でも 50 年後でも大きく変わらないのではないかということが言えるのではないか。

D 委員：　人が集まって交わっていくというところはすごく公園の本質的な機能だと思います。
もう 1 つ大事だと思うのは、広い空間の中で体を動かしながらとか、自分を表現しながら人とインタラクションできるというのは結構公園の大きな機能かなと思って、そういったときに、何かをやりたい人がこの公園を自由に使えるというか、主体的な行為をしたい人が公園を使えるという、運用面のガイドというのがすごく大事なのかなと思っています。日本の公園はすごく公的、官的なので、勝手に使えないというような印象がほかの国に比べて強いなと思っていて、そういう中で今後多様なライフスタイルとかアクションがある中で、自分がこういうことをやりたいと言ったときにそれができて、それが表現になって、それで人とつながれるという、そういう部分が結構広い空間を有する空間の特徴だと思うので、そういったことが受け入れられる運用体制みたいなところは中に入れておいてもいいのではないかと思いました。

事務局：　資料を作成する中での表現的な部分、表現の仕方が少し足りていないなというのも改めて感じているところであります。50 年後を見据えてということで、まだデザインガイドを

見ると、少し敷島の特徴を生かしつつ、また 50 年後の姿としては少し足りていない部分があるのではないかということもございました。
そういった中で、我々もガイドを作る上で、Well being、ある意味健康的な幸せ、それは本当に体的な部分もございますし、精神衛生上の癒しの部分、こういったところは基本に敷島のこれまでの歴史等を考えていくと、大事なところかなと考えつつガイドは作ってきているところであります。
先ほどの「つかう」のところを、交わる、人がここで交流し合うというような考えも非常に大事ではないかというご意見も皆様方のある意味共通の中でおっしゃっていただいたのかなと思っておりまして、そういった意味では資料 4 の敷島公園の県の管理エリアのスポーツ健康ゾーンとなりますが、今後 50 年先の絵は、なかなか表現はできない中で、近々水泳場を改修する上で、いろいろな方が、多様な人材が交わるスペースを作る、提供する、そういった中で先ほどＤ委員からもありました自由に使える、なかなか自由にとなると、今の制度上でいくといろいろ課題がまだあるかなと思いながらも、考え方とすると、いろいろな方がここに来ていただいて自由に利用していただく中で多様な人材が交流していく、いろいろな発見がある、ある意味いろいろな非日常を感じていただくというようなことも我々提供していく必要があるかなということで書かせてはいただきました。ただ、その辺の説明なり発展性なりというところがなかなか表現しきれていないのかな。ある意味作り方のところで言葉に終始した面もあります。
ここは市の公園エリアと県の公園エリアがありますが、スポーツを介した健康、そういったところが主体なのかなと感じました。そういう意味でも、この敷島公園の特徴を生かすし、今後どういう方向で、都市づくりも含めて、この公園をどのように価値を上げていくのか、そういったところも少し加えて表現してみたいと改めて思いました。また我々もいろいろ知恵を絞って資料を作り込んでいきたいと思いますので、事前にもしかしたら各委員にご意見を直接伺うような場もあるかもしれませんし、そういったときにはぜひお知恵をお借りしたいと改めて感じました。以上でございます。

Ｅ委員：　先程、世界の様々な場所や都市において、緑地や公園をどのように都市計画上に位置付け、都市機能として活かしているかをご紹介したのですが、今回の敷島公園についても、明確な都市計画上の目標をいくつか定めたほうが考えやすいのではないかと思っています。
例えば先ほどお話が出ていた人口減少に対しては、交流または間接人口を増やしていって、結果として定住人口を安定させていくみたいなところを 1 つの長期的な狙いとして、敷島公園の活用のあり方や利用のされ方を検討するとか、あるいはこれからの不測の災害に対する担保用地として、先程ご紹介したコペンハーゲンの公園のように、常時はオープンスペースとして使用でき、豪雨時には調整池として機能するよう整備し、中心市街地への流出や浸水を抑制していく減災機能を備えいくとか。
急速な人口減少や、気候変動下における都市防災のあり方など、50 年あるいは 100 年ぐらいのスパンで考えていかなければいけない潜在的な都市スケールの命題がいくつかあると思うんです。
それらを解決するために敷島公園を使うとしたならば、どういう目的や使い方になるのかという目標設定をまず定めて、そこからどういうデザインになっていくのかとか、どんな

状態にしていくのがその機能を担保できるのかみたいなことをバックキャスティングで考えていく必要があると思いました。
それから、これまでは人を中心としたプログラミングというか、プランニングをされているのですが、これだけ広い公園用地ですので、どこもかしこも同じように密度高く人の活動が展開できるような場所である必要もないと思うんですね。活動を展開するところは自由度を持っていろいろなことができるようにしたほうがいいと思うのですが、この公園緑地の中で例えば何割かは自然植生に還元していくという考え方で、自然の森を養っていき、地域の生態系を維持継承していくみたいな方向で、50 年後 100 年後を考えていくというのもあると思うんです。その理由の 1 つとして、人口が減っていきますので、自然樹林として安定させて管理コストを下げていかなければいけないという実際的な問題もありますし、本多静六さんが明治の森で計画したように、50 年後 100 年後の森を今から養っていくということが次の世代に対する大きな資産を残していくということでもあると思うんですね。人的利用だけでなく、自然資源を含めた資産継承あるいは形成という考え方もあると思いますので、すべてを全面的に同じような密度で人が活用していくということでなくてもいいのではないかと思っています。
総じて、県や市や周辺地域の潜在的な都市課題の状況を踏まえて、まずは敷島公園全体をどのような都市課題に対してどのように機能させていくのか大きな方向性をさだめ、その具体的な展開においては、園内の個々のエリアや周辺との関係や場所性に応じて、優先度に即したヒエラルキーの持たせ方とか、時系列の計画やデザインのありかたを検討していくということだと思います。短期的な人の活動だけではなく、どのような生態系を養っていくのかも包めた都市緑地または都市公園としての 50 年後 100 年後の将来像のモデルを敷島公園で示せたらと思いますので、今一度、広域的かつ長期的な視野で考えていただけたらと思います。

事務局：　今伺っているお話の中で、なかなか今のデザインガイドのままそこに進むというのは多分無理だと思っています。これから 50 年後の目標をどう定めるかも出てきますが、いろいろ各委員の方に個別にご相談させていただきながら、もう 1 度このデザインの案であるとか 50 年後の姿という形をまず共有させていただく。その共有させていただく中で、前橋ですとか県の計画の中でもこういう位置づけがありますよというおさらいをさせていただく、そういう機会をもう 1 度有識者意見交換会という形を持たせていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

事務局：　次回の意見交換会でまちづくり計画との連携、民間活力、市民参加のあり方ですとか、デザイン全般の意見交換となっているのですが、この間にもう 1 度意見交換を持たせていただいて、1 カ月程度計画より延びてしまうという形にはなろうかと思うのですが、もう 1 度今書いてある第 4 回意見交換会というのを今回の意見交換の追加という形で、最後第 5 回の意見交換会を持たせていただければという認識で言わせていただきました。

C 委員：　プロセスを 1 つ増やすというのは大賛成で、まだここに集まっている皆さんの中で 50 年後のイメージが共有できていない感触がありましたので、もう少し議論を尽くして市民の

方々にお見せするという、そういうふうにしたほうがいいのではないかと思います。
追加資料 1 に敷島エリアのイメージスケッチというのがあるのですが、今議論しているのは敷島エリアのことなのでこういう絵でいいと思うのですが、50 年後、敷島エリアのほか、群馬県の 50 年後はどうなっているのだろうかということがあって、その中で敷島公園はどうあるべきかという、それがないと、公園だけデザインしてもしょうがないと思うので、今回のテーマは敷島エリアなのですが、もう少し視点を広げてみんなでイメージを共有する、そういうことも必要かなと感じたところなので、ぜひプロセスは増やしていただければありがたいと思いました。以上です。

4．その他

5．閉会

以上